

(水沢・一関)

岩手・ちゅうそんじけいだいおおいけ
中尊寺境内大池跡

- 1 所在地 岩手県西磐井郡平泉町平泉字衣関
- 2 調査期間 二〇〇一年(平13)二月～二〇〇二年三月
- 3 発掘機関 平泉町教育委員会
- 4 調査担当者 及川 司
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

中尊寺は奥州藤原氏初代清衡が建立した寺院で、JR東北本線平泉駅から北西約2kmの丘陵に位置する。標高は二五m～一五〇mで、

境内の北を衣川が東流し北上川へ注ぐ。丘陵の南東には標高二二～四〇mの低位段丘が広がり、この段丘上に特別史跡毛越寺跡附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡、史跡柳之御所遺跡をはじめとする奥州藤原氏関連の遺跡が密集する。なお、中尊

寺は、平安時代末期における奥州藤原氏の東北経営を考える上で、歴史的意義の重要性に鑑み、一九七九年に境内の一三四万㎡が特別史跡に指定されている。

大池跡は中尊寺金色堂の南東約一〇〇mの開けた平坦地にある。標高約七一mで水田として使用されてきた。寛永一八年(一六四二)の「一山絵図」には馬蹄形に描かれ、「池」と記されている。大池跡の中央付近には中島が残り、数本の杉が生えている。南東部には緩やかに湾曲する細長い形の田畑があり、池跡の岸辺及び堤防の跡と推定されていた。一九六一年から一九六四年に、周辺の古経藏跡、古経藏南方遺跡、大池北方遺跡とともに調査が行なわれ、この時の調査成果では、大池跡は造園的手法に乏しいことから、池の造成に着手したものの完成に至らず中途で放棄されたと解釈された。その後一九九六年から中尊寺内容確認調査が開始され、大池跡とその周辺地を重点的に調査している。一九九七年に大池跡北西高台に一二世紀前半に作られた導水路上流と推定される溜池状遺構が、また一九九八年には大池跡北東部で池の岸辺が確認され、予想以上に池跡の規模が大きいこと、一二世紀後半に北岸一帯が埋め立てられていることが判明した。

今回の調査は大池跡東岸を対象とするものである。トレンチ調査の結果、池の水を堰き止めるための堤防跡とみられていた細長い水田は、やはり人工的に築かれた堤防で、元々東へ向かって下がる斜

面地形に大規模な盛土工事をしたものであることが判明した。盛土以前の斜面には土留めの木材が据えてある。今回報告する木簡（塔婆）は、この盛土中の下位（旧斜面直上ではない）から完全な形で出土した。盛土からの遺物は他には全くない。

堤防跡の内側は緩やかな斜面の岸辺となつて、池の泥土の堆積がみられ、地表から一・六mの深さで池底となる。池底で完形のロクロかわらけがまとまってみつきり、またハスの果托も発見された。

池跡は岸辺も含めて作り直し（Ⅱ期目）が行なわれており、はじめ（Ⅰ期目）の池よりもやや規模が小さく深さも浅くなっている。

Ⅱ期目の池跡からは少数のかわらけのほか、ハスの果托と果実が採取された。

Ⅰ期目の池底出土のロクロかわらけは一二世紀前葉のもので、中尊寺に伝わる初代清衡による「供養願文」の天治三年（一一二六）の年代と符合する。「供養願文」には堂、塔、池、橋についての記載があり、大池跡はこの供養願文伽藍を構成する池といえる。

8 木簡の积文・内容

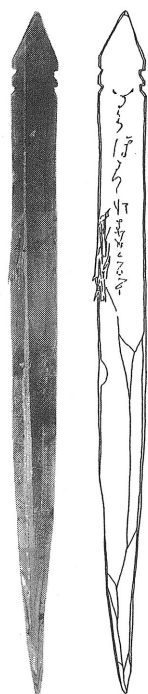
(1)  〔ねか〕
527×37×7 061

文字は片面の上半のみにある。出土時は普請に関わる木簡の可能性もあるかと思われたが、明らかに盛土中から出土し、その状況からは特に意図的に埋め置かれた様相は看取されなかった。なお、釈

読については、東京大学史料編纂所の岡陽一郎氏のご教示を得た。

9 関係文献

平泉町教育委員会『平泉遺跡群発掘調査略報』七八（二〇〇二年）



（及川 司）